

近畿大学医学部第二生理学教室
松尾 理 教授 退任記念誌

「知 恩 報 恩」

川崎医科大学 呼吸器内科 大植 祥弘

松尾教授との出会いは、近畿大学医学部25期生の代表として、学年の要望と今後の展望をお伺いするために同期の丸谷君と教室を訪れさせていただいたのが最初でした。その後、先生のもとへは何度となく足を運ばせていただきましたが、それは自分たちの現状と将来に対する憂いではなく、夢や希望を語っていただける、その内容に心躍らされたからでした。

阪神大震災を機に、物理学の道より医学の道を志し、ようやく医学部に入学できた時期の近畿大学は、医学教育カリキュラムの大きな変革期であり、自分たちの将来に不安を感じる日々でもありました。

2010年の大河ドラマは「龍馬伝」でしたが、近畿大学も改革期であり、まるで幕末の様相を呈していたかもしれません。我々25期生は、その時代に生き、友人と朝まで酒を酌み交わしながら、自らの将来や大学への思いを語り会いました。その後、友人達の応援で学年代表となり、さらに学生代表となる過程の中で、「我々の将来は自らの手で切り開く」という、幕末の志士のような熱い思いを常に感じていました。

松尾先生は、幕府（大学）の要職（カリキュラム委員長、教務委員長）を歴任し、教育システムの抜本的改革を進められている、まさに幕臣、勝海舟でありました。そしてついに、我々二人は、その勝海舟の話しを聞くべく、先生の教室を訪れさせていただきました。もしもの時は・・・と考えていたかもしれませんが、しかし、諸先輩方もご存じの如く先生のお話しは奥が深く、次々と繰り出されるお話を聞いていくうちに、自らの思慮の浅さを痛感すると同時に、もっとお話を聞きしたいと思い、時が経つのを忘れていて先生のお話を聞きしていた事を今でも思い出します。

また先生には、異国（欧米の教育システム）のお話をよく聞かせていただき、異国に対する強い憧れを抱いていました。そんな折、松尾先生から、異国（米国）へ渡る（留学する）お話をいただきました。米国での医学教育を体験すべく近畿大学医学部同窓会の支援のもと、Northeastern Ohio University, College of Medicineに大学6年生で留学させていただきました。学生として、米国の臨床教育カリキュラムに参加できた事は自分の人生において大きな転機となった事は言うまでもありません。

私は松尾先生と出会い、PBL教育システムの普及をすべく全国行脚に同行し、また米国留学、さらに川崎医科大学にご講演に来られて時には私に講演の機会をいただきと、自己研鑽の場を数多く与えていただきました。私は、今、先生の主任教授退任記念誌の原稿を書かせて頂きながらひとつひとつ、先生から受けた御恩を思い返す（知恩）と同時に、どのようにして先生と母校への御恩に報いるべきか（報恩）という思いで一杯です。しかし、若輩の私にとって大きすぎる御恩に報いることなどまだまだ到底できません。今は、先生に教えて頂いた「病める者の為の医療とは」「良医・教育とは」「科学者とは」、この三つを胸に刻み研鑽すべく、思いを新たにしているところです。

これからも、どうか、私達をご指導していただき、より大きな世界へ導いて頂きたいと思っています。



(筆者：左、米国留学時、Dr. Guytonとともに)